治承４年(1180) 頼朝 源氏再興の兵を挙げる
《千葉氏が大きく貢献》

平治の乱(1159年)で父源義朝が破れ、源頼朝が伊豆狩野川の旧中洲"蛭ケ小島"に流された(14歳)。
治承４年、雌伏20年伊豆豪族北条時政等の援護の下、伊豆目代の山木兼隆を討った後、石橋山で平家方追討軍の大庭景親に敗れ、真鶴岬から安房に逃げ房総で再起を果たし遂に鎌倉に東国軍事政権を樹立する。

治承４年(1180) 頼朝 源氏再興の兵を挙げる
《千葉氏が大きく貢献》

平治の乱(1159 年)で父 源義朝が破れ、伊豆狩野川の旧中洲“蛭ケ小島”に流された(14)。治承４年、雌伏 20 年伊豆豪族北条時政等の援護の下、伊豆目代の山木兼隆を討った後、石橋山で平家方追討軍の大庭景親に敗れ、真鶴岬から安房に逃げ房総で再起を果たし、遂に鎌倉に東国軍事政権を樹立する。

〔挙兵の時代背景〕

◦平清盛(63)は、太政大臣に登り詰め朝廷を牛耳る。
◦平家に有らずんば人でなし…と呆れるばかりの栄華傲慢に満ち溢れていた。
◦清盛は、後白河院を鳥羽殿(鳥羽離宮)に幽閉、都を福原に移す。
◦当時の房総には、平家の繁栄と横暴さの増大に伴い、民意は離れ反平家的機運がみなぎっていた。
◦東国の武士団が、敢えて平家打倒に向かうだけの深刻な状況に追い込まれていた。

〔千葉常胤がいち早く頼朝軍に参向の背景〕

◦長元の乱(1028 年)以降、千葉忠常の子常将・孫の常長は、それぞれ頼朝の祖源頼義(前九年の役)、源義家(後三年の役)と深い関係となる。
◦常胤(63)は、久安２年(1146)頃より頼朝の父義朝に属し、保元の乱(1156 年)に参陣。
◦平治の乱(1159 年 12 月)で敗れた義朝は翌１月殺され(38)、頼朝は伊豆へ配所。以降千葉の地、立花庄(東庄)は藤原氏・相馬御厨は平家方の佐竹氏に奪われる等、強い圧力があった。これを取り戻すことが最大の懸案となる。
◦常胤六男胤頼は、頼朝とは京の情勢を伝えるなど、挙兵以前から繋がりがあった。
◦常胤七男日胤は、頼朝の祈祷師(園城寺=別称:三井寺の僧)。以仁王が園城寺から南都へ逃れる時に同行。宇治平等院付近で敗死(治承４年３月)。

〔頼朝の挙兵までの行動〕

◦治承４年(1180)4 月、以仁王(30)は平家追討の令旨を諸国の源氏に発す。
◦頼朝の下に令旨届く(4 月 27 日)。以前から独自に挙兵の準備をしていたが、これを機に具体化する。その以前に、日胤に心願成就を祈祷させている。
◦平家追討令は既に露見していて、6 月 19 日京の三善康信(41)の書状で、以仁王の事件・源氏追討決定の旨を告げ、奥州に逃れるべきと助言される。
◦6 月 27 日、頼朝・三浦義澄・千葉胤頼の三者密談。義澄・胤頼両者の本拠地は、海に面し強力な海軍力を持つ。併せると相模湾西部から東京湾まで制海権がある。
◦その故もあり、挙兵失敗の折は三浦半島から房総へ渡海することにしていた。

〔頼朝の挙兵時の行動・考え〕

◦事前に散見・相手方の動向を確認し、極めて慎重に経路を選ぶ。緊急時は海上に逃れることも考慮する。
◦挟み討ちに合わぬよう山間部を避け海沿いの道を選ぶ。しかも騎馬軍団が通れる。
◦必ず国衙の掌握が果たされてから入国。占領した在庁官人を支配下に置いた。
◦国府を結ぶ交通路を支配。鎌倉入りは、挙兵当初から計画している。

〔石橋山を決戦の地に選んだ訳〕

◦伊豆と鎌倉の中間地点で、要害の地であること。
◦敗北したとき、安房へ脱出することを考慮していた。

〔鎌倉軍事政権を作る計画〕

◦伊豆で挙兵の後、独自の軍事政権の樹立を計画。
◦頼義以来の地で、父義朝が築き上げた関東制覇の根拠地で、武家の棟梁としての権威を継承することが必要と決意していた。
◦当初から安房・上総・下総・武蔵を経て、鎌倉入りを目指していた。
◦千葉常胤の進言の鎌倉入りは、広く関東武士団からの支持支援を受けたとする為。
◦山と海に囲まれた天然の要塞であり、いざという時は三浦から安房へ逃げられる。
◦山を城と考えれば,街普請に専念出来る(街造りは,千葉の街を手本にした説がある)。

〔上総広常の動向〕

◦広常は平家有力家人“八か国の侍の別当”という地位にあり、上総介藤原忠清とは深刻な対立関係にあった。
◦強大な軍事力は、砂鉄・製鉄と牧の管理権が生み出した。こうした勢は、頼朝を背後から脅かす存在でもあった。
◦頼朝に従う時、上総一国のほか下総の一部に及ぶ広大な地域からの、兵力の糾合動員のため、平家方勢力を掃討しながら可成りの時を要した。
◦広常は、頼朝軍が隅田河畔まで進んだ時、漸く軍勢２万騎で到着。頼朝は歓ぶ処か遅参を咎めた。広常は、これに感服して和順した。
◦広常の合流で、頼朝軍の士気は大いに振るい、武蔵・相模と進むうちに方々から東国武士が馳せ参ずる。

〔9 月 20 日から 10 日間、下総鷺沼に滞在の訳〕

◦この地は、前方は東京湾･後に菊田川、下総台地の南西端の舌状台地の天然要害地。
◦上総広常の部隊の参向により、強力な広常軍を前に頼朝に従わざるを得ない様に仕向けた。また、先に述べた通り、同軍の合流は、頼朝軍の士気も大いに高めた。
◦武蔵国入りを前にして、武蔵武士団、秩父平氏一族･河越・畠山・江戸・葛西氏等の懐柔に日を費やす。
◦中でも江戸重長は、頼朝に敵対する姿勢を見せていたので、大事を取った。
◦千葉常胤は、豊島・葛西と秩父一族の畠山氏とは、姻戚関係にあり参向することを説得に努めた。
◦石橋山合戦で分散した人々の参向を待った。

平家追討の令旨から
鎌倉までの道のり（治承４年：1180）

〔4月9日　以仁王（後白河院 第二皇子）平家追討の令旨〕

◦以仁王(30)は、源頼政(77)の求めにより、諸国源氏に令旨を出す。

◦10日、源行家(為義の末子・十男)がこれを携えて源氏・八条院領・反平氏系の大寺社へ東国に向けて出発する。

⇓

〔4月27日　頼朝の下に以仁王の令旨届く〕

◦叔父 源行家から令旨受領。

⇓

〔5月7日　「日胤」戦勝祈願〕

◦園城寺(三井寺)の僧「日胤」（常胤七男）宛に御願書“心願成就”の祈祷を依頼。石清水八幡宮に参籠して、源氏の氏神に祈祷する。この頃、挙兵の意思を固める。

⇓

〔5月26日　宇治川の合戦（平等院の戦い）〕

◦平家追討の令旨は、平家に密告されており、園城寺から南都に逃げる途中に合戦となる。以仁王・源頼政・日胤は討伐される。

⇓

〔6月19日　三善康信の使者・伊豆に書状〕

◦頼朝の乳母の子 三善康信(41)から、以仁王らの事件・源氏追討の決定の旨を書状で告げると共に、奥州へ逃げるよう進言。

⇓

〔6月24日　挙兵を決断・累代の御家人を召集〕

◦頼朝、安達盛長(46)に命じ、東国武士団に御書を送り、召集する。

⇓

〔6月27日　頼朝・三浦・千葉と三者密談〕

◦三浦義澄・千葉胤頼と「他人これを聞かず」と密談。

◦三浦・千葉両者の本拠地は、海に面し強力な海軍力のもと、相模西部から東京湾まで制海権を有している。挙兵失敗の際は、三浦半島から房総半島へ渡海を考慮。

⇓

〔7月10日　安達盛長から東国武士団の動向報告〕

◦相模国では、請文を差し出す武士団は多いが、波多野義常・山内首藤経俊は全く請け入れず。

◦上総広常・千葉常胤・三浦義明等は、左右なく了承する。

⇓

〔8月17日　伊豆にて挙兵〕

◦伊豆一の宮の三島大社の神事の日。伊豆・西相模の御家人、北条・安達・工藤・土肥など300余騎で、平家打倒の兵を挙げる。伊豆目代山木兼隆を討つ。

◦20 日、頼朝は北条時政(43) 以下を率いて、相模国土肥へ向かう。

⇓

〔8 月 23 日　石橋山に陣を敷く 300 余騎〕

◦相模国：石橋山に向かう。この地を決戦の場としたのは、伊豆と鎌倉の中間地点で要害地であった。

◦頼朝軍 300 余騎に対し、平家軍大庭・伊東ら 3000 余騎で不利の為敗北。頼朝は、僅か 6 人で山中へ逃げた。兵軍は散り散りになり、北条時政(43)は甲斐に逃げた。

◦三浦一族：三浦･佐原･大多和･和田･多々良･筑井氏等は、既に当地(石橋山)に向けて出発していたが、悪天候のため間に合うことが出来なかった。

◦安西･丸･上総･下総などの房総の武士団は、地理的に困難であり参向出来なかった。

⇓

〔8 月 24 日　頼朝軍の敗北〕

◦頼朝軍は破れ、散り散りに逃げて山中に身を隠す。

◦大庭軍は、頼朝探策に箱根山中から土肥に向かう。

◦同日、三浦勢と畠山勢が由比ヶ浜で遭遇し、戦いとなる。

⇓

〔8 月 26 日　美浦義明 衣笠城で敗死〕

◦三浦が本拠の衣笠に帰り着く間に、上総広常の弟：金田頼次(三浦の娘婿)は、70 余騎を率いて加わる。

◦平家方の畠山重忠(17)ら、頼朝方の三浦一族の衣笠城を攻略。

◦平家方 1000 余騎、三浦方は 400 余騎。三浦義明(89)は討死。他の一族は、安房へ敗走する。

◦頼朝は、密かに三浦氏に房総渡海を伝えていた。

⇓

〔8 月 28 日、29 日　安房国上陸〕

◦8 月 28 日 頼朝、土肥真鶴岬より船で安房館山：洲崎に上陸。

◦翌 29 日 「(土肥)実平を相具し、扁舟に棹さして平北郡猟嶋に着き給う。北条以下の人々これを拝迎す。」と、安房鋸南：龍島に再び上陸。

⇓

〔9 月 1 日　安西景益に御書〕

◦在地武士(在庁家人)に、安房目代を捕えて参上するよう命じる。

◦石橋山の敗北を教訓に、海上支配権のある勢力を味方につけて、何時でも海上に脱出することが出来るようにしていた。

⇓

〔9 月 3 日　安房から東国武士団へ御書〕

◦東国武士団、小山頼政･下河辺行平･豊島清元･葛西清重等に御書、参上を促す。

◦東上総の広常の居所へ出発、途中宿泊予定の処、安房住人:長狭常伴の夜襲を受けるが、いち早く察知、三浦義澄らが撃退。頼朝は引き返す。

⇓

〔9月4日　安房に滞在〕

◦安西景益一族が、在庁家人を連れて参上。各地に遣わした使者の帰りを待つ間、安西館に滞在する。

◦広常の許へ和田義盛(34)、常胤の許へは、安達盛長を遣わし、参上する命を伝える。

⇓

〔9月5日　洲崎明神へ参拝〕　　この日、京では、頼朝追討の宣旨が下る。

⇓

〔9月6日　和田義盛 上総から帰参〕

◦上総広常のもとより帰参。「千葉常胤と相談のうえ参上」との返事を報告。

⇓

〔9月9日　安達盛長 下総より帰参〕

◦常胤のもとより帰参。「一族を率いて御迎えに参上」との返事。 併せて、「いまの在所は、取り立てて要害ではない。早く鎌倉に到着される様」との進言を報告。

⇓

〔9月11日　丸御厨を巡検〕

◦この地は、河内源氏の祖：源頼義の前九年の役の功績により、朝廷から恩賞として授かる。その後、伊勢神宮に寄進。以降、代々伝わる。

⇓

〔9月13日　千葉氏、上総・下総目代を討つ〕

◦千葉胤頼･甥の成胤、300余騎を従えて、上総介藤原忠清の目代:平重国の館を襲撃、これを討つ。広常は、上総国府攻防戦に参加。

◦平家方下総目代も相次いで討つ。

◦安房･上総の平家軍掃討に続く下総の掃討は、房総三国制圧となり頼朝の鎌倉入りを果たす第一条件が整うことに成る。

⇓

〔9月14日　千葉庄 結城浜合戦 千田親政を生捕る〕

◦千田親政は下総目代が誅されたことを知り、常胤が頼朝を迎えに上総へ赴く隙に、原･金原･栗飯原らと匝瑳内山館を出て、1000余騎で千葉館を襲う。

◦祖母の葬儀の名目で館にいた成胤は、常胤に来援を請うと共に、手勢で迎え討つ。結城浜で激戦となり、千田軍は破れ親政は、千田庄次浦へ退くも、生け捕られる。

⇓

〔9月14日　頼朝 上総から下総へ〕

◦上総で、常胤(300余騎)･広常(1000余騎)の参向を得て、下総へ向かう途中、広常は先陣を申出るが、常胤は「下総は自分の配下地であるので口はださぬよう」広常を制して、先陣して頼朝を案内した。

◦頼朝は千葉庄で、君待橋･白幡神社･妙見社等に立寄り･参詣している。15~16日泊。

⇓

〔9月17日　下総国府に常胤一族で参上〕

◦広常の参陣を待たず下総国へ向かう。千葉常胤、子息6人・孫成胤ら一族は下総国府で頼朝に参会する。先ず、千田親政を召しご覧頂き、次に駄餉(=干し飯・携帯用の食糧)を献上する。

◦頼朝(39)、常胤(63)を座右に置き「これからは常胤を父のように遇する」と言われる。

◦国府台西側台地の縁辺に、大幕百帖・源氏の白旗六七十流を打ち流し、威を示すと、江戸・葛西氏等も参上する。

⇓

〔9月19日　上総広常軍 隅田川辺に参上〕

◦広常軍2万余騎で参上するも、頼朝は非常に立腹して全く許す様子もない。

◦広常、頼朝の器量に感服して和順する。

⇓

〔9月20日　千葉庄 鷺沼宿に戻り幕営すること10日余（懐柔に費やす)〕

◦反勢力の武士団が多い武蔵国入り前に、慎重に動静を探り大事をとった。

◦石橋山合戦で散り別れた友軍の集合を待った。

⇓

〔9月28日　江戸重長宛 御書を出す〕

◦葛西清重に、江戸重長を騙し討ちすることを命ずる。

⇓

〔9月30日　新田義重・足利俊綱の様子〕

◦新田義重(46)、御書に返事なし。足利俊綱、平家に組し武蔵国の国府を焼き払う。

⇓

〔10月2日　隅田川を渡り武蔵国に入る〕

◦常胤・広常らの、櫂で漕ぐ舟で太日川・隅田川を渡り武蔵国に入る。豊島清元・葛西清重ら参上。足立遠元も迎えに参ずる。

◦江戸氏を始め、河越・畠山氏の秩父党も懐柔に応じ、武蔵軍を入れて軍勢3万余騎。

◦隅田宿に頼朝の乳母 寒河尼(八田宗綱の娘・小山政光の妻)が末子14歳を連れ参上。元服させ烏帽子を与え、小山宗朝と称する。

⇓

〔10月3日　上総常仲を討つ〕

◦伊北庄司常仲は、下総国府に入った時、頼朝に謁見したがその後背いた為、千葉胤正に討たせる。彼は広常と対立していた。

⇓

〔10月4日　武蔵武士団参上〕

◦畠山重忠・河越重頼・江戸重長が参上。

⇓

〔10 月 6 日　鎌倉入り（武蔵国に入り 3 日目）〕

◦武藏･相模国を進むうち東国の源氏武士、諸方から馳せ参ずる。頼朝は、数十万の兵を従えて鎌倉入り。先祖の源頼義･義家以来の吉例として、畠山重忠(17)を先陣に、千葉常胤(63)を後陣に配す。

⇓

〔10 月 7 日　八幡宮に遙拝〕

◦八幡宮に遙拝。父･義朝の住んでいた亀ヶ谷の旧跡に臨んだ。

⇓

〔10 月 11 日　伊豆から政子(24)を迎え、再会する〕

⇓

〔10 月 20 日　富士川で平家軍と頼朝軍 対峙〕

◦頼朝追討の平家軍(4 千余騎)と頼朝軍(5 万余騎)、富士川を挟んで布陣。夜半頼朝軍の動きで、驚いて飛び立った水鳥の羽音を、夜襲と勘違いした平家軍は、混乱して京へ逃げ帰る。

⇓

〔10 月 21 日　関東平定のため上洛を踏み止まる〕

◦平家軍を追い攻めんと動くが、常胤･広常･義澄らは、佐竹が未だに帰服しない等、先ずは関東を治めることが大事と進言する。このことにより黄瀬川の宿所に帰り、安田義定(47)を遠江国の守護、武田信義(53)を駿河国の守護に置き地固めをする。

◦この日、土肥実平の計らいで、御宿所にて九郎義経(22)と対面する。

⇓

〔10 月 23 ～ 24 日　相模国府で論功行賞を行う〕

◦相模国府に着き、始めて勲功の賞：本領安堵、或は新恩を給う。

⇓

〔10 月 27 日　佐竹氏を帰服させる為に発つ〕

◦鎌倉を発ち、相模･武蔵･下総国を経て、数日を費やし常陸国府へ着く。

◦常陸国府を足場に、能く能く計略を練る。11 月 4 日、金砂にて佐竹義政を誅殺、翌 5 日冠者秀義(30)を金砂城に攻めたが奥州に逃亡された。他の一族は降伏した。

⇓

〔11 月 7 日　頼朝　佐竹討伐から帰還〕

⇓

〔12 月　鎌倉新造御亭に移る〕

《了》

参考文献：

丸井 敬司氏「千葉氏一族」

野口 実氏「源氏と坂東武士」

講 談 社 「再現日本史」

— 昔の千葉を知ろう —

「千葉氏を語る会」

市民活動フェスタ 2018
参加出展